

新刊紹介

アンソニー・B・アトキンソン 著

『21世紀の不平等』

(東洋経済新報社, 2015年)

安藤 道人*

本書は、不平等研究の世界的大家であるアトキンソンによって書かれた啓蒙書である。本書の元となった論文の1つである“After Piketty?” (*The British Journal of Sociology*, Vol.65, Issue.4, 2014) のタイトルが示す通り、この本はトマ・ピケティのベストセラー『21世紀の資本』(みすず書房, 2014)を意識しながら書かれた本である。しかし、この本はただのピケティ・ブームの便乗本ではない。ピケティの師匠筋であり共同研究者でもある著者が、彼の半世紀に及ぶ膨大な不平等研究や政策研究をベースに書き上げた、集大成ともいふべき本である。

本書の構成はシンプルな三部構成である。第I部の「診断」では、戦前から戦後にかけて一度は縮小した不平等が再度拡大しているメカニズムが考察される。まず世界の不平等の動態がデータに基づいて議論され(第1章)、そしてヨーロッパを中心に、なぜ戦後直後の数十年で不平等が縮小し、その後再び拡大したのかが検証され(第2章)、そしてその不平等の再拡大の背景にあるメカニズムが、経済理論や実証分析に基づいて考察される(第3章)。次いで第II部の「行動のための提案」では、第I部の考察を踏まえて、再拡大する不平等に対する対応策が提示される。すなわち、技術変化への対応(第4章)、雇用・賃金政策(第5章)、公的な資本・資産政策(第6章)、累進課税(第7章)、そして社会保障(第8章)について、15の提案が提示される。そして第III部の「できるのだろうか?」では、第II部での15の提案に対して想定さ

れる批判に対する応答が展開される。具体的には、経済成長とのトレードオフ(第9章)、グローバル化による制約(第10章)、そして財源の制約(第11章)という観点から、想定される反論に対して応答を試みている。

本書の持ち味は、著者のアトキンソンが、市場経済が生み出す不平等や貧困に対して極めて批判的な視点を持ちつつも、市場経済の働きやそれに対する公的介入の帰結について深い理論的・実証的知見を持つ一流の経済学者であるということだ。その結果、不平等の「診断」やそれに対する「提案」、そして想定される批判に対する「応答」全てにおいて、常に市場経済や公共政策の働きや、それらについての最新の研究に注意深く目を配った稀有な本となっている。そしてそうであるがゆえに、本書は、一般の読者、社会保障研究者、そして経済学や不平等研究の専門家全てにとって有益な一冊となっている。

まず、研究者でない多くの一般の読者は、「この本は経済と政策に興味を持つ一般読者向けに書いた」(p.6)という著者の言い分は受け入れ難いだろう。確かに本書には難しい数式や統計分析の話はほとんどでてこないし、文章は非常に平易に書かれている。一方で、記述の厳密性を担保するための著者の努力によって、一読しただけでは理解が難しい箇所も散見される。しかし、そのような箇所を読み飛ばしてでも読み通す価値が本書にはある。市場経済という、思い通りにもならず、たいしてよくわかってもない「なまもの」に真摯

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障基礎理論研究部研究員

に向き合い、その中に再分配制度や社会保障制度という楔を再度打ち込み直そうとする一人の知識人の強い意気込みや、今後のあるべき財政・社会保障改革の方向性について多くのヒントを得られるはずだ。

次に、社会保障制度の歴史、制度、あるいは実務に精通している社会保障研究者や政策担当者にとっては、本書は逆に物足りないと思う部分もあるかもしれない。なぜなら、本書の第Ⅱ部で提示される15の提案は、どれもアイデア段階の大雑把なものであり、実行可能性や細部の設計は今後の議論にゆだねられているからだ。しかも、ときに大胆な提案も含まれており、これは現実的な政策論者や実務家からは拒否反応もでるだろう。また第Ⅲ部では、税と社会保障給付に関する提案についてマイクロシミュレーションに基づいたさらなる検討がなされているが、それらはイギリスの制度に基づいた検討であり、日本には容易に当てはめられない。しかし、著者がこの本全体で目指しているのは、社会的文脈や科学技術の変化によって刻一刻と変容する不平等のメカニズムを理解し、それに立ち向かうための政策の方向性の大局観を示すことである。従って、制度や政策の細部

についての知識や知恵を競い合う形で本書を批判するのは生産的ではないだろう。再分配や社会保障という領域は、市場経済に対して「受け身」に回りがちで、かつ市場経済から切り離して考えられる傾向が強い。しかし著者は、市場経済と不可分なものとして、それでいながらも決して脇役ではない存在として、再分配制度や社会保障制度のあり方を考えている。このような著者の積極的姿勢から学べるものは多い。

最後に、経済学や不平等研究の専門家にとっても、本書は学びの宝庫である。著者アトキンソンが本書で取り上げているテーマのどれか1つについてでも最先端の研究をフォローしたことがある研究者ならば、著者が各方面で成し遂げてきた研究成果の大きさに圧倒されるだろう。膨大な脚注には、経済学の古典から未刊行の最新ワーキングペーパーまで縦横無尽に参照されている。この本を丁寧に読むことで、この研究領域で、今、何が問題とされ、どのような研究がなされているのかがよく分かる。日本の不平等研究の活性化への貢献も大きいだろう。

(あんどう・みちひと)